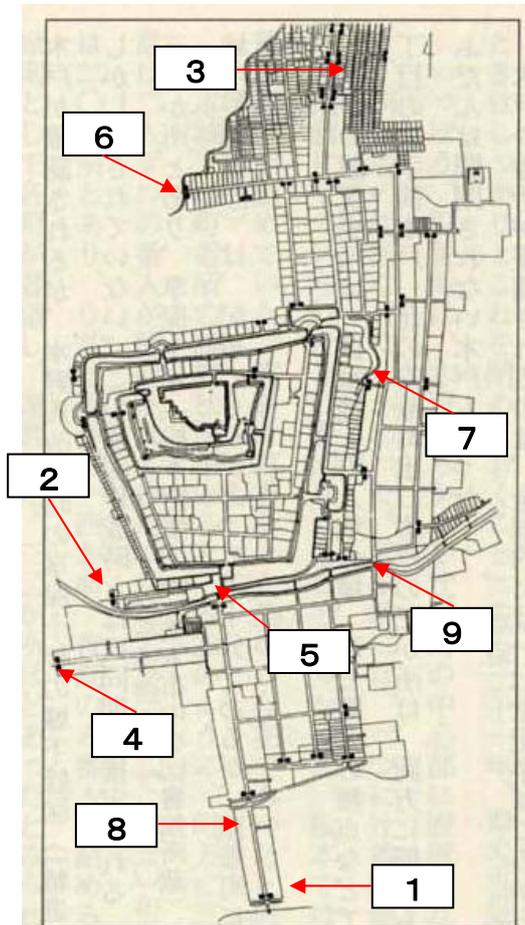


8-1 城下町の木戸と番所ガイド

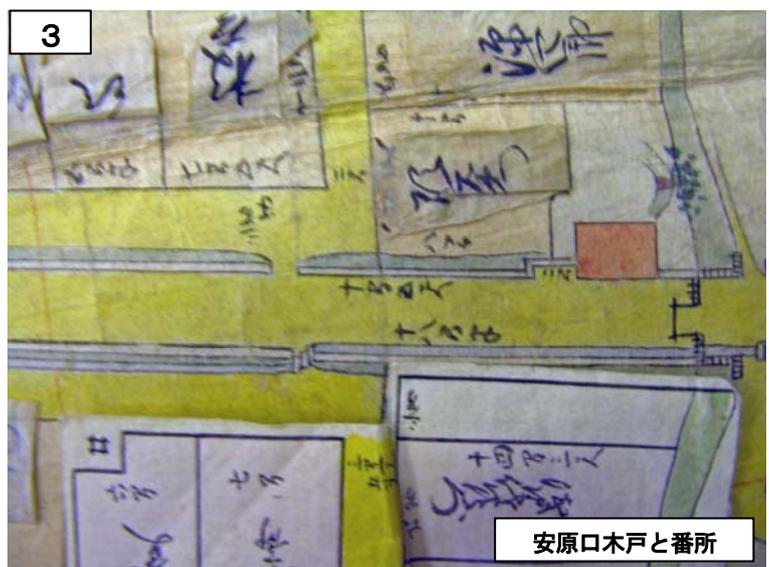
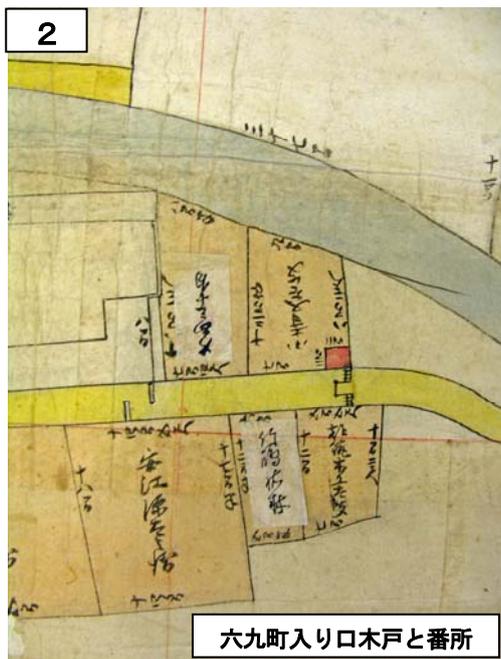
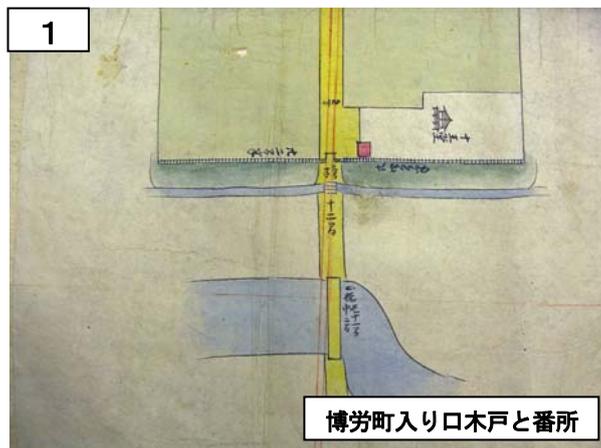
城下町には、「木戸」と呼ばれる木で造られた門が設置されていた。木戸は「町門」とも呼ばれ、木戸番所が付随されている場合が多い。このように城下町の辻々には木戸が建てられていて、内と外が仕切られていた。木戸は日の出と共に開けられ、日の入りと共に閉門されるという徹底した管理がしかれていた。



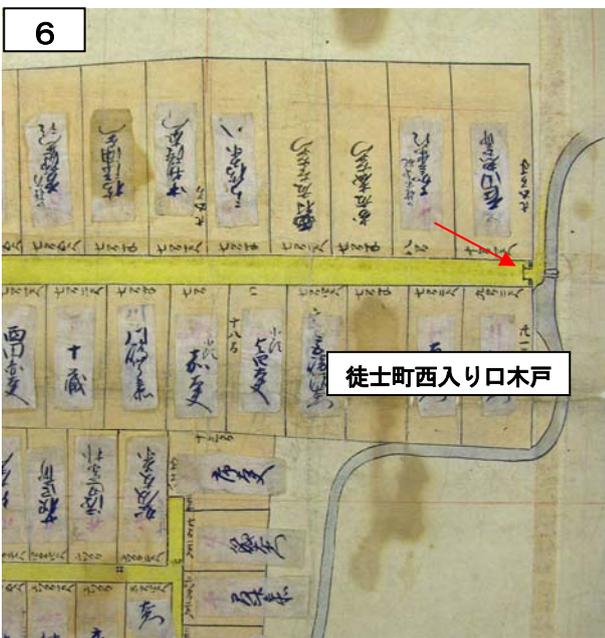
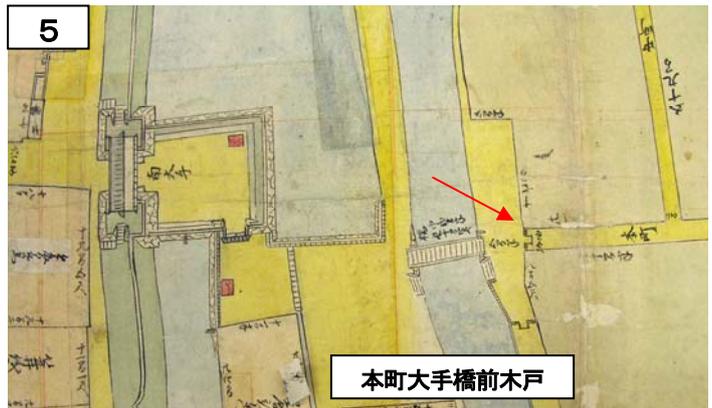
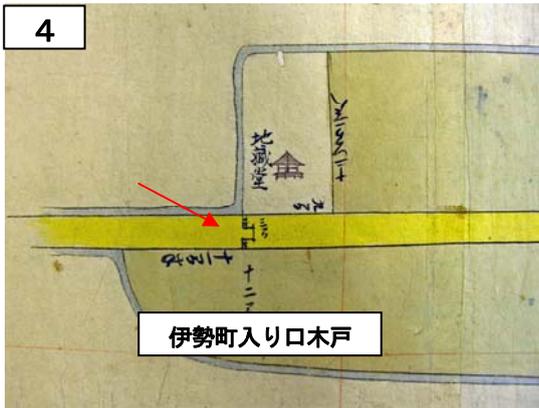
1、松本城下の木戸の分布

左図は松本城下の木戸の分布の図である（松本市史による）。木戸は外敵の侵入や不審者の出入りを警戒し、防禦（ぼうぎょ）するための警備施設であった。昼間は自由通行を許されていたが、夜間と非常時には閉鎖され、交通は遮断された。城下の出入り口（南、西、北・・・在と町の区別）、武家地と町人地の境、町と町の接点等に木戸や番所が置かれていた。木戸は年代によって相違があるが、約25ヶ所くらいあった。

2、城下の出入り口木戸と番所（図1・2・3・4）



博労町口、本町大手橋前、安原口の3ヶ所の大木戸は特に大事とされ、両袖には柵を設置して外部からの侵入に備えた。(図1・3・5)



番所には木戸番所、町番所、同心番所があった。町番所には2人ずつの番人が配置されていた。20～33ヶ所あった。町の運営であった。町方の喧嘩・狼藉、火事の取締りにあたった。

3、武家地と町人地の境の例

4、城下町の要所の例

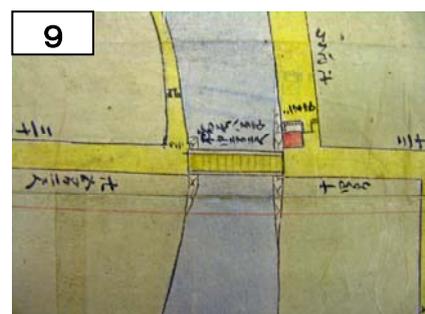
武家地には辻番所(約29ヶ所)があり、士分の者が詰めていた。任務は町番所と同じであった。木戸・番所は藩の施設であったから、建設・修理の費用や給与などの経費は、藩の負担であるのが建前であった。実際は町民に負担を掛けていることが少なくない。番所には、捕物に必要な突棒・さすまた・からみ手・提灯などを揃えていた。藩士の町同心が詰める同心番所は張番(はりばん)ともいわれ、本町、東町、安原町口の3ヶ所であった。木戸や番所は身分秩序を維持するためのものでもあった。



上馬出しから東町に出る境



本町の境 袖留堀の本町と博労町境



大橋上土と東町入口番所と木戸

